

中間株主通信

株主の皆さまへ

株主の皆さまにおかれましては、平素よりご支援を賜り、御礼申し上げます。

2026年3月期中間株主通信をお届けするにあたり、ご挨拶申し上げます。

エプソンは売上収益の8割以上を海外で生み出しており、グローバル企業としての責任を自覚しています。私自身も、米国とシンガポールでの駐在経験を通じ、米国や中南米、東南アジア、南アジアなどの現地市場で経験を積んできました。これまでエプソンの事業は東アジア、東南アジア、南アジア、中南米などの新興国市場とともに成長してまいりましたが、さらにそこでの事業展開を加速するとともに、今後の展開としてはインド、中東、アフリカに注目しています。例えば、インドでは「Make in India」政策に沿った製造・開発拠点の強化を進めています。また、中東、アフリカでは販売体制の再編によって柔軟性と迅速性を重視したオペレーションを展開しています。

こうした戦略を支えるのが、「お客様起点のイノベーションの徹底」です。

私は、お客様の現場に向き合い、地域ごとの課題や期待に応え続けることが、これからエプソンの持続的な成長につながると考えています。一例として、新興国のニーズに応えて誕生した大容量インクタンク搭載モデルは、上市から14年間で累計販売台数1億台を超え、エプソンの収益を支える柱の一つへと成長しました。

エプソンは創業以来、「省・小・精」に代表される優れた技術を持ち、それをどう社会に役立てていくかという視点で価値を提供してきました。「省・小・精」の基盤技術をベースとした技術開発は企業価値の源泉と位置付けています。具体的には、インクジェット技術ではMEMS

加工技術による高精度なPrecisionCoreプリントヘッドを開発し、高速・高画質印刷と環境負荷低減を両立させ、家庭用から産業用まで幅広い事業展開を実現しました。他にも、水晶・半導体の融合による高速演算や高速通信に不可欠な高精度タイミングデバイスやセンシング技術の開発、プロジェクトの高画質を支えるマイクロディスプレイ・光学技術、高品質な磁性粉などの材料技術、これらの技術を実現する加工・製造技術など、エプソン独自のコアとなる技術資産を数多く有しています。こうした技術を最大限に活用した既存事業での進化に加え、さらなる技術発展により、長期視点で社会課題の解決と企業の持続的成長を見据えた新たなイノベーションの創出を目指しています。

エプソンが世界中のお客様にとって信頼される存在となり、投資家の皆さまからお預かりした資本と信頼を、企業価値・株主価値としてお返しできるよう努めてまいります。今後とも、変わらぬご支援とご期待を賜りますようお願い申し上げます。



代表取締役社長 CEO

吉田 潤吉

連結決算ハイライト

売上収益は、6,674億円(前年同期比1.0%減)となりました。プリントイングソリューションズ事業セグメントが堅調な推移となったことに加え、マニュファクチャリング関連・ウエアラブル事業セグメントも売上伸長となりましたが、為替のマイナス影響が大きく、全社では減収となりました。

事業利益は、ビジュアルコミュニケーション事業セグメントの減収影響

に加え、米国関税コスト増、為替のマイナス影響などがあり、374億円(同26.7%減)となりました。また、為替差損の計上により、営業利益は311億円(同10.9%減)、税引前中間利益は308億円(同6.3%減)となりました。親会社の所有者に帰属する中間利益は187億円(同19.8%減)となりました。



事業セグメント別の概況

* 売上収益構成比率は、各報告セグメントの売上収益を、各報告セグメント売上収益合計（「全社費用・その他」を含まない）で除して算出しています。

プリンティングソリューション事業セグメント

売上収益 **4,783億円** (前年同期比 **0.4%増**)

セグメント利益 **544億円** (前年同期比 **14.4%減**)

(売上収益)

■ オフィス・ホームプリンティング事業 **減収**

軟調な中国市場の影響を受けながらも堅調な販売を維持していますが、為替によるマイナス影響が大きく減収となりました。インクカートリッジモデル本体では販売数量減となる一方、大容量インクタンクモデル本体の販売数量はアジア・南米などの新興国、および西欧を中心に増加し、さらに、オフィス共有IJP本体も日本国内や北米、新興国での拡販が進展しています。消耗品の売上については、大容量インクタンクモデルおよびオフィス共有IJP向けは増加していますが、インクカートリッジ販売減の継続、為替のマイナス影響により、減収となりました。

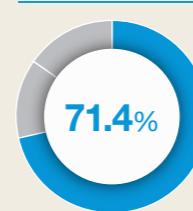
■ 商業・産業プリンティング事業 **増収**

為替によるマイナス影響はありましたが、買収したFieryの売上収益が加わったことなどにより、増収となりました。商業・産業IJPの完成品ビジネスは、新製品投入によりサイネージなどで本体売上が伸長していますが、中国市場の需要停滞が継続している影響でプリントヘッド外販ビジネスは減収となりました。小型プリンター他は為替のマイナス影響を受けたものの、欧米における販売が堅調であったことにより、前年同期並みです。

(セグメント利益)

主に商業・産業プリンティング事業における利益減、米国関税コスト増の影響、さらに為替によるマイナス影響により、減益となりました。なお、2024年12月に買収したFieryは、当期の売上収益、セグメント利益にプラスの影響となっています。

売上収益構成比



売上収益



セグメント利益



オフィス・ホームプリンティング事業



商業・産業プリンティング事業



ビジュアルコミュニケーション事業セグメント

売上収益

900億円 (前年同期比 **16.7%減**)

セグメント利益

83億円 (前年同期比 **48.1%減**)

(売上収益)

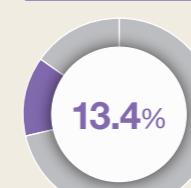
■ ビジュアルコミュニケーション事業 **減収**

欧米を中心とした教育需要の減少に伴うビジネスプロジェクターの販売減、軟調な中国市場を中心にホームプロジェクターの販売減があつたほか、為替のマイナス影響を受け、大幅な減収となりました。

(セグメント利益)

減収の影響により、大幅な減益となりました。

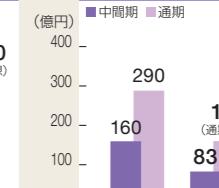
売上収益構成比



売上収益



セグメント利益



マニュファクチャリング関連・ウェアラブル事業セグメント

売上収益 **1,016億円** (前年同期比 **12.9%増**)

セグメント利益 **53億円** (前年同期はセグメント損失5億円)

(売上収益)

■ マニュファクチャリングソリューションズ事業 **前年同期並み**

顧客案件の需要増などにより中国向け売上を伸ばし、欧州での市場停滞や為替によるマイナス影響はありますが、前年同期並みとなりました。

■ ウエアラブル機器事業 **増収**

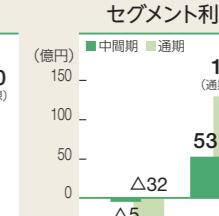
国内におけるインバウンド需要に伴い堅調な販売が継続したことにより、増収となりました。

■ マイクロデバイス事業 **増収**

水晶デバイスは売上拡大が継続し、半導体は一部顧客で需要回復があり、増収となりました。

(セグメント利益)

マイクロデバイス事業を中心に増収となったことや前期より進めてきた費用削減効果などがあり、大幅な増益となりました。



マニュファクチャリングソリューションズ事業



ウェアラブル機器事業



マイクロデバイス事業



Topics 1

ペロブスカイト太陽電池など先端技術のインクジェット化に貢献する強溶剤対応の新インクジェットプリントヘッド「S3200-S1」を市場投入

PrecisionCoreプリントヘッドシリーズの新ラインアップとなる「S3200-S1」は、強溶剤対応・広幅・高解像度を特長とし、ペロブスカイト太陽電池など先端分野におけるインクジェット技術の活用を一層加速します。

エプソンがEP-GB投資事業有限責任組合¹を通じて2025年4月から出資している韓国発スタートアップのGosan Tech Co., Ltd.²では、強溶剤対応プリントヘッドの既存ラインアップでペロブスカイト太陽電池をはじめとする工業応用分野で活用されている「S800-S1」を用いて、インクジェット方式の利点を生かしたペロブスカイト太陽電池の量産化検証を進めており、今後「S3200-S1」を導入することで、量産装置化の加速に寄与します。

ペロブスカイト太陽電池市場は急速な成長が見込まれているため、エプソンは強溶剤対応プリントヘッド「S800-S1」と「S3200-S1」で、新プロセスや材料の研究開発から量産向けの装置まで幅広く支援し、インクジェット技術による新たな工業・産業応用分野を切り開いていきます。



新インクジェットプリントヘッド
「S3200-S1」

GOSAN
Tech

Topics 2

インド国内において初となる大容量インクタンク搭載インクジェットプリンターの製造施設を開設

2025年7月にエプソンとしてはインド国内初となる大容量インクタンク搭載インクジェットプリンター（以下、大容量インクタンクプリンター）の製造施設をパートナー企業の工場内に開設し、2025年10月より量産を開始しました。

大容量インクタンクプリンターは、従来のカートリッジ式に比べて1mlあたりのインク単価が安く、交換も容易であることから経済性と利便性の両立を実現しています。また交換頻度が少ないため、消耗品や廃棄物の削減につながり、環境負荷の低減にも貢献できます。この新しい製造施設は、インド国内の需要に応じた生産の現地化を目指す取り組みの一環です。

インドは経済が大きく成長しており、豊富な人材が多いことから、エプソンのグローバル戦略の中でも重要な役割を担う地域と位置づけています。今後もエプソンは、地域社会との共創を重ねながら、エプソンならではの価値を追求し続け、皆さまに提供してまいります。



エプソンのプリンター製造ラインを開設した
インド企業の工場外観

Topics 3

エプソンアトミックスにおいて不要な金属を原料として資源化する新工場が稼働開始

エプソンアトミックス（以下、アトミックス）において2023年10月より建設を進めてきた北インター第二事業所 金属精錬工場（以下、北インター第二事業所）が2025年6月に竣工し、9月に稼働を開始しました。

北インター第二事業所では、アトミックス内の製造工程で規格外となった金属粉末製品や工場内から排出される金属くず、エプソングループが排出する金属端材・使用済み金型など、不要になった金属をアトミックスの金属粉末製品の原料として再資源化します。北インター第二事業所で生成した高品位な原料を使い、アトミックスの本社および北インター事業所において、独自の金属粉末製造技術により金属粉末を製造し、金属射出成形部品にも活用します。アトミックスでは、新精錬プロセスの導入により、金属資源の循環利用を実現することに加え、安定的に高品位の製品を供給し、次世代の省電力・小型デバイスの実現に貢献します。



北インター第二事業所 金属精錬工場

*1 エプソンとエプソンクロスインベストメントが共同出資して設立。

*2 OLEDディスプレイやペロブスカイト太陽電池の製造用インクジェット装置を開発。

